

昭和・平成の総決算

歴史講演家 黒田裕樹が描いた夢

～日本史と歩む過去・現在・未来～

黒田裕樹（歴史講演家／大阪府内の高校社会科教師）

1. 聖徳太子

今から 1400 年以上も前に訪れた「建国以来の危機」に敢然と立ち向かい、現在に至る我が国の歴史を形づくった英雄である聖徳太子(しょうとくたいし)。彼の功績は、内政面においても外交面においても素晴らしいものがありますが、今回は外交について紹介したいと思います。

我が国の内政における思い切った改革に成功した聖徳太子は、いよいよ外交問題の抜本的な解決へと乗り出しましたが、そのための手段として、中国大陸を約 300 年ぶりに統一した隋(ずい)に対し共同で対抗するために、朝鮮半島の高句麗(こうくり)や百済(くだら)と同盟を結びました。

事前の様々な準備を終えた聖徳太子は、小野妹子(おののいもこ)を使者として、607 年に満を持して 2 回目の遣隋使を送りました。

この頃、隋の皇帝は二代目の煬帝(ようたい)が務めていました。「日本からの使者が来た」との知らせに煬帝が宮殿に現れると、手にした我が国からの国書(こくしょ)を読み始めました。すると、みるみるうちに煬帝の表情が険しくなり、ついには顔を真っ赤にして叫びました。

「何だ、この失礼な物言いは！」

「こんな無礼で野蛮な書は、今後は自分に見せるな！」

煬帝のあまりの怒りぶりに、隋の外交官たちが震え上がった一方で、我が国からの使者である小野妹子は涼しい顔をしていました。

さて、煬帝をここまで怒らせた国書は、以下の内容で始まっていました。

「日出(ひい)ずる処(ところ)の天子(てんし)、書を日没(ひぼつ)する処の天子に致す。恙無(つつがな)きや(=お元気ですか、という意味)」。

果たしてこの国書のうち、どの部分が煬帝を怒らせたのでしょうか。

国書を一見すれば、「日出ずる」と「日没する」に問題があるような感じがしますね。「日の出の勢い」に対して「日が没するように滅びゆく」とは何事か、という意味に取れなくもありません。しかし、この場合の「日の出」と「日没」は、単なる方角として使われただけです。すなわち「日の出」が東、「日没」が西という意味であり、煬帝が激怒した理由は別にあります。

それは「天子」という言葉です。天子とはチャイナでは皇帝、我が国では天皇を意味する君主の称号ですが、煬帝は自国よりも格下である（と思っていた）我が国が、この言葉を使ってくるとは予想もしていなかったのです。

なぜなら、チャイナの考えでは、「皇帝」は世界で一人しか存在してはいけないことになっているからです。

今から 2200 年以上前に中国大陸を史上初めて統一した秦(しん)の王であった政(せい)は、各地の王を支配する唯一の存在として「皇帝」という称号の使用を始め、自らは最初の皇帝ということで「始皇帝(しこうてい)」と名乗りました。これが慣例となって、後の大陸では、支配者が変わるたびに自らを「皇帝」と称し、各地の有力者を「王」に任命するという形式が完成しました。

そして、この構図はやがて大陸周辺の諸外国にも強制されることになり、皇帝の臣下となって許してもらおうようお願いするという「朝貢(ちょうこう)外交」を我が国も行わざるを得なくなったのですが、こんな屈辱的な話はありません。

大陸に隋という新たな支配者が誕生したのを機会に、聖徳太子はこれまでとは違う態度によって、すなわち「『皇帝』 = 『天皇』と名乗れるのは我が国も同じだ」という強い意思で、対等な関係の外交に臨む姿勢を「天子」という言葉で示したのでした。

東アジアの超大国である隋に対して、これまでのように服属するのではなく、対等な立場での関係を希望するという「重大な決意」を聖徳太子は見せつけたわけですが、これは、我が国にとって命取りにもなりかねない、非常に危険な賭けにも思えました。

我が国が隋に強気の外交所勢を見せた一方で、かつて隋と激しく戦った高句麗は、自国が勝ったにもかかわらず、その後もひたすら低姿勢を貫き、屈辱的な言葉を並べて許してもらおうとする朝貢外交を展開し続けていました。

隋に勝った高句麗でさえこの態度だというのに、敢えて対等な関係を求めるという、ひとつ間違えれば我が国に対して隋が攻め寄せる口実を与えかねない危険な国書を送りつけた聖徳太子には、果たして勝算があったのでしょうか。それとも、自国の実力を無視した、あまりにも無謀な作戦だったのでしょうか。

結論を先に言えば、当時の隋は、我が国へ攻め寄せる余裕が「全くといっていいほどなかった」のであり、また、その事実を聖徳太子が冷静に見抜いていました。

当時の隋は、高句麗との戦いによる出費で国力が低下していたのみならず、煬帝の圧政による政情不安もあり、国内が決して安定した状態ではなかったのです。

さらに、我が国が島国であることから、攻めようとすれば無数の大きな船が必要になるなど、多額の出費がかさむことも十分予測できました。

そんな状況のなかで、無理をして我が国へ攻め込んでもし失敗すれば、国家の存亡にかかわるダメージを与えかねないことが煬帝をためらわせましたし、我が国が高句麗や百済と同盟を結んでいることが、煬帝には何よりも大きな足かせとなっていました。

こうした外交関係のなかで隋が我が国を攻めようとすれば、同盟国である高句麗や百済が黙っていません。それどころか、逆に三国が連合して隋に反撃する可能性も十分に考えられますから、もしそうなれば、いかに大国隋といえども苦しい戦いになることは目に見えていました。

つまり、隋が我が国を攻めようにも、リスクがあまりにも高過ぎるためにできないのです。従って、国書の受け取りを拒否して我が国と敵対関係になるという選択は不可能であり、そうだとすれば、我が国からの国書を黙って受け取るしか手段がありませんが、その行為は我が国が隋と対等外交を結ぶことを事実上認めることを意味していたのです。

2 回目の遣隋使を送る以前から、聖徳太子は朝鮮半島をめぐる動きや隋の現状などを徹底的に調査したことで、東アジアの正確な国際情勢をつかんでいました。その結果、隋が我が国を攻める可能性がゼロに等しいことを見越したうえで、対等外交を一方的に宣言した国書を隋に送りつけたのです。言うなれば、聖徳太子の完全な「作戦勝ち」でした。

チャイナの皇帝が務まるほどですから、煬帝も決して愚かではありません。だとすれば、聖徳太子の作戦が理解できて、自分に対等外交を認める選択しか残されていないことが分かったからこそ、より以上に激怒したのかもしれませんが。

さて、煬帝は遣隋使が送られた翌年の 608 年に、小野妹子に隋からの返礼の使者である斐世清(はいせいせい)をつけて帰国させましたが、ここで大きな事件が起こってしまいました。

何と、小野妹子が隋からの正式な返書を紛失してしまったのです。外交官が国書を失くすという信じられないミスに大あわてとなった朝廷でしたが、本来なら死罪になってもおかしくなかった妹子は、結局軽い罪に問われたのみで、すぐに許されました。

これには、隋からの返書の内容があまりにも我が国にとって厳しく（例えば、同じ「天子」と称したことに対する激しい怒りなど）、とても見せられるものではなかったゆえに、敢えて「失くした」ことにしたからだという説があります。聖徳太子や推古(すいこ)天皇が小野妹子の罪を軽くしたのも、妹子の苦悩を以心伝心で察したからかもしれません。

さて、煬帝からの返書とは別に、斐世清が我が国からの歓待を受けた際に送ったとされる国書が日本書紀に記されていますが、その内容は従来のチャイナの諸外国に対する態度とは全く異なるものでした。

斐世清からの国書は「皇帝から倭皇(わおう)に挨拶(あいさつ)を送る」という文章で始まります。「倭王」ではなく「倭皇」です。これは、隋が我が国を「臣下扱いしていない」ことを意味しています。文章はさらに続きます。

「皇(=天皇)は海の彼方(かなた)にいながらも良く民衆を治め、国内は安楽で、深い至誠(しせい、この上なく誠実なこと)の心が見受けられる」。

朝貢外交にありがちな高圧的な文言(もんごん)が見られないばかりか、丁寧な文面で我が国を褒(ほ)める内容にもなっていますね。

この国書が意味することは非常に重要です。つまり、終始ぶれることなく対等外交を進めた聖徳太子のように、国の支配者が相手国に対して、主張すべきことは主張する態度を堂々と貫けば、たとえ世界の超大国を自負する隋であっても、まともに応じてくれることを示しているのです。

一方、隋からの激しい攻撃をはね返しながらか朝貢外交を続けた高句麗に対して、隋は「いつでもお前の首をすげかえられるが、皇帝たる自分にそのような面倒をかけるな」と一方的に突き放した内容の国書を送りつけています。悲しいかな、これも歴史の真実なのです。

明るく608年、聖徳太子は3回目の遣隋使を送りましたが、この際に彼を悩ませたのが、国書の文面をどうするかということでした。一度煬帝を怒らせた以上、チャイナの君主と同じ称号を名乗ることは二度とできませんが、だからといって再び朝貢外交の道をたどることも許されません。考え抜いた末に作られた国書の文面は、以下のように書かれていました。

「東の天皇、敬(つつ)しみて、西の皇帝に白(もう)す」。

我が国が皇帝の文字を避けることで隋の立場に配慮しつつも、それに勝るとも劣らない称号である「天皇」を使用することで、両国が対等な立場であるという方針を変更しないという断固たる決意を示したのでした。ちなみに、この国書が「天皇」という称号が使われた始まりとされています(ただし、これには異説もあり)。

聖徳太子が遣隋使で見せた気概は、隋の我が国に対する態度を明らかに変えました。そこには、国内において「和の尊重」や「話し合いの重視」という柔軟な姿勢を示しながらも、外国に向けては毅然(きぜん)とした態度で一步も引かず、命がけで取り組むという厳しい姿勢で臨んだ、聖徳太子の隠れた業績がありました。

そして、聖徳太子による対等外交の方針は、それまでのチャイナによる冊封(さくほう)体制から脱却するきっかけとなり、我が国に自主独立の精神と独自の文化を生み出すきっかけにもなったのです。

その意味においても、外交面において聖徳太子が我が国に残した功績は極めて大きなものでありました。

ところで、例えば「至誠は天に通じる」といったような、我が国の伝統的な思想として、ひたすら低姿勢で相手のことを思いやり、また争いを好まず、話し合いで何事も解決しようとする考えがありますが、そういったやり方は、たとえ国内では通用しても、国外、特に外交問題では全くといっていいほど通用しないということが、聖徳太子と高句麗に対する隋の態度の大きな違いを見ればよく分かります。

我々日本人には、かねてより清廉潔白(せいれんけつぱく、心が清くて私欲がなく後ろ暗いところのないこと)を好む風潮があり、それ自体は非常に重要なことではありますが、対外的には全く通用しないどころか、逆に利用されてしまうという危険性すらあるのです。聖徳太子と高句麗との外交姿勢の大きな違いは、現代に生きる私たちに大きな教訓を残しているといえるでしょう。

なお、遣隋使以後の我が国は、大陸文化の吸収のために朝貢はしても、冊封(さくほう)されない国、という立場をとりました。これを「不臣(ふしん)の朝貢国」といいます。これは、チャイナの冊封体制からの脱却を意味しており、聖徳太子の功績の大きさをうかがわせるともいえます。

2. 織田信長

「歴史の転換者」として名高い織田信長(おだのぶなが)には、いくつかの「顔」が存在しているといわれています。羽柴秀吉(はしばひでよし、後の豊臣秀吉=とよとみひでよし)や柴田勝家(しばたかついえ)など、多数の有能な家臣を従えて天下統一を目指したという「武将」としての顔のほか、楽市楽座(らくいちらくざ)や南蛮(なんばん)貿易によって経済力を高めた「政治家」としての顔、そして、数多くの人間を無慈悲(むじひ)にも殺害したとされる「虐殺者(ぎゃくさつしゃ)」としての顔などです。

今回は、信長が美濃(みの、現在の岐阜県南部)の攻略を果たした頃から始まった「信長包囲網(ほういもう)」をいかにして打ち破ったかを紹介しながら、彼の「政治家」としての優れた先進性や、彼が本当に「虐殺者」なのかどうかなどについて振り返ってみます。

信長が美濃の攻略を目指していた頃は、室町幕府の権威はさらに低下しており、将軍の足利義輝(あしかがよしてる)が、永禄(えいろく)8 (1565)年に松永久秀(まつながひさひで)らによって暗殺されてしまいました。

次の将軍職を目指していた義輝の弟の足利義昭(あしかがよしあき)は、それまで匿(かくま)われていた越前(えちぜん、現在の福井県北東部)の朝倉義景(あさくらよしかげ)から離れ、義景の家臣であった明智光秀(あけちみつひで)の仲介で信長を頼りました。

それまでに北近江(きたおうみ、現在の滋賀県北部)の浅井長政(あざいながまさ)と同盟を結び、妹のお市(いち)を長政の妻としていた信長は、この好機に早速上洛(じょうらく、京へ向かうこと)を決意しました。

信長は上洛の途中で南近江(みなみおうみ、現在の滋賀県南部)の六角氏(ろっかくし)を破ると、永禄 11 (1568) 年に無事に京へとたどり着き、義昭を将軍へと就任させました。名ばかりではあっても、武家の棟梁(とうりょう)である室町幕府の将軍を誕生させ、また京に入ったことで朝廷を保護する立場となった信長は、天下統一に向けて大きく前進することになったのです。

義昭は、自らの将軍就任の最大の功労者である信長に深く感謝し、管領(かんれい、将軍を補佐して幕政を統轄する役職のこと)もしくは副将軍になるよう勧めましたが、信長はいずれも辞退し、代わりに堺を含む和泉(いづみ、現在の大阪府南西部)の支配を認めさせました。一見すると、いわゆる「名よりも実を取った」と思われる信長の行為でしたが、その裏にはしたたかな計算がありました。

ここで信長の立場で考えてみましょう。管領や副将軍を引き受けるということは、信長が室町幕府の組織の一員に、もっといえば義昭の家来になるということを意味します。信長の最終的な目標は、自身による天下統一ですから、いずれは義昭を見限るつもりでしたし、現実にそうになりました。しかし、その際にもし彼が管領や副将軍であったとすれば、主君に対する裏切りという重罪を犯してしまうこととなります。

いくら戦国の世とはいえ、主(あるじ)に対する謀反(むほん)というのはダメージが大きく、後の天下取りにも影響を及ぼすのは避けられません。だからこそ、信長は義昭の誘いを断り、その代わりに我が国最大の貿易港の一つであった堺をおさえるために、和泉の支配を義昭に認めさせたのでした。堺を我が手にしたことによって、信長はこの後、貿易などの経済面において他の戦国大名よりも大きく優位に立つこととなります。

さて、義昭が将軍になったばかりの頃の二人の関係は良好でしたが、信長は次第に義昭を圧迫するようになっていきました。やがて信長の本意を悟った義昭は激怒して、信長を倒すべく様々な作戦を練り始めました。

後の世に「信長包囲網」と名付けられた、信長にとって人生最大のピンチが訪れようとしていました。

堺に対する支配権を手に入れて経済力をさらに高めた信長は、次なる領地の目標を越前の朝倉義景と定め、永禄 13 (1570) 年旧暦 4 月に京を出陣し、敦賀(つるが)の金ヶ崎城(かねがさきじょう)を落とすなど、緒戦で勝利を収めました。

ところが、まさに好事魔多(こうじまおお)し。信長の義理の弟であり、最も信頼を寄せていた武将の一人であった浅井長政が、信長を裏切って北近江から攻め寄せるという驚くべき情報がもたらされたのです。

予想もしなかった事態に、さすがの信長も気が動転しました。越前と北近江から挟(はさ)み撃(う)ちにあってしまえば、いくら信長でも勝てるわけがありません。しかもその危機は確実に訪れようとしており、もう時間が残されていませんでした。

覚悟を決めた信長は、こう宣言しました。

「ワシは逃げる」。信長の決死の逃避行が始まりました。

信長はわずかな手勢とともに金ヶ崎を脱出すると、駆けに駆け一目散に京を目指しました。こうして朝倉氏と浅井氏による包囲網から辛くも逃れた信長は、数日のうちに京に戻ることができましたが、その供はわずか10人ばかりであったと伝えられています。

後の世に「金ヶ崎の戦い」と呼ばれた負け戦(いくさ)の屈辱を味わった信長は、浅井・朝倉の両氏を深く恨むようになりました。やがて信長は同盟相手の徳川家康(とくがわいえやす)とともに、元亀(げんき)元(1570)年旧暦6月の「姉川(あねがわ)の戦い」で浅井・朝倉の連合軍を破りましたが、両氏に止めをさすことはできませんでした。

息を吹き返した浅井・朝倉の軍勢は京を目指しましたが、信長に阻(はば)まれると比叡山(ひえいざん)に立てこもって反撃の機会を待ちました。浅井・朝倉軍を匿(かくま)ったということは、比叡山の延暦寺(えんりやくじ)が信長を敵とみなしたことを意味しており、信長はここでも衝撃を受けました。

さらに信長を悩ませたのが、いわゆる「三好(みよし)三人衆」といわれた三好氏の勢力が摂津(せつ、ここでは現在の大阪市付近のこと)で挙兵すると、本願寺(ほんがんじ)が三人衆に味方したという事実でした。つまり、信長は戦国大名の他に、延暦寺や本願寺といった、強大な宗教勢力をも敵に回して戦わなければならないのです。

それにしても、なぜ信長は宗教勢力から「仏敵」とみなされたのでしょうか。実は、その理由には大きな「権益」がありました。

信長は大胆な発想で岐阜などに城下町を建設していきましたが、その際に、当時の常識であった通行税を徴収するための関所や、商売をするために必要な組合、すなわち座を設けませんでした。いわゆる「楽市楽座」の制度を採用したのです。

楽市楽座によって商売の自由が認められた信長の支配地では、多くの人口を頼りに各地の商人がこぞって集まり、大変な賑(にぎ)わいを見せました。その結果、信長の領内は他の大名や宗教勢力などのそれに比べて、低い税率であっても自然と収入が増加していったのです。

しかし、信長によるこれらの斬新な政策は、それまでの関所や座による莫大(ばくだい)な収入を「権益」として頼りにしていた宗教勢力などにとっては、目障りな商売敵(がたき)でしかありませんでした。

一方の信長からしてみれば、宗教勢力は本来の布教活動の精神を忘れ、庶民(しょみん)の迷惑を顧(か)えりみずに、自分たちの都合だけで権益にしがみついているようにしか見えなかったのです。

自己の武力を背景に勢力を拡大した信長は、やがて宗教勢力に対して権益の放棄と武装解除を、信

長軍による防衛を条件に迫りましたが、それこそ「眠っていても儲(もう)かる」權益を宗教勢力がそう簡単に手放すはずがありませんでした。信長と宗教勢力との衝突は、いわば時間の問題であり、そして信長にとって最悪のタイミングで起きてしまったのです。

浅井・朝倉軍は比叡山に登ったまま動こうとはしませんでした。もし信長が京から離ればすぐにでも占領できる距離にいたために、信長自身も京から動くことができず、そうこうしている間に、本願寺が率いる伊勢長島(現在の三重県桑名市付近)の一向一揆(いっこういっき)の動きが活発となり、伊勢の長島城や尾張の小木江城(こきえじょう)を次々と落としました。

このうち、尾張の小木江城は信長の弟が守っていたのですが、最後には自害に追い込まれました。京を駆けぬ信長は、可愛い弟が一向一揆によって滅ぼされていくのを、指をくわえて見ていることしかできなかったのです。

宗教勢力によるこれらの無情な仕打ちに対して、信長は内心で怒り狂いながらも、じっと耐え続けました。そうこうしているうちに元亀元(1570)年も年末になると、朝廷と足利義昭によって和睦(わぼく)が成立して、信長はやつとの思いで岐阜に戻ることができました。

講和が成立した背景には、兵農分離していない朝倉軍の都合もありました。雪深い越前は真冬になると身動きが取れなくなるので、来春の農作業を確実に行わせるためにも帰国を急いでいたからです。こんなところにも信長との差がありました。

年が明けて元亀2(1571)年、信長は近江の姉川を封鎖して佐和山城(さわやまじょう)を落とし、南近江の支配権を確立するとともに、朝倉氏や浅井氏、あるいは本願寺などの連絡網を断つことに成功しました。

包囲網が連携(れんけい)することを防いだ信長は、同年旧暦9月12日に、信長に抵抗を続けた比叡山の焼き討ちを敢行しました。長い歴史を誇った延暦寺は業火(ごうか)に焼かれ、逃げまどう多くの僧侶(そうりょ)のみならず、女人禁制のはずなのになぜか存在した女性や、あるいは子供までもが容赦なく首をはねられました。

比叡山の延暦寺は信長に敵対する宗教勢力としては滅亡しましたが、一向一揆の軍勢は相変わらず信長を苦しめ続けました。そして元亀3(1572)年になると、信長が最も恐れていた甲斐(かい)、現在の山梨県)の武田信玄(たけだしんげん)が將軍義昭の誘いに応じ、上洛を目指して動き始めました。

信玄は「三方ヶ原(みかたがはら)の戦い」で徳川家康と信長の連合軍を苦も無く蹴散らすと、不気味な足音とともに京を目指して進軍を続けました。信玄に京へ攻められては、信長とて勝ち目はありません。信長の運命はまさしく風前の灯(ともしび)となったはずでした。

しかし、天は信長に味方しました。上洛の途中で信玄が病に倒れ、帰らぬ人となってしまったのです。

信玄が挙兵し、三方ヶ原の戦いで家康を破ったことを知った義昭は喜び、信玄の動きを警戒して岐阜に戻っていた信長の隙(すき)をついて、居住していた将軍御所の周囲に堀をめぐらせて防備を固めたうえで、信長に対して挙兵しました。

しかし、信玄が亡くなったことで義昭の野望は夢と終わり、信長に攻められて降伏せざるを得ませんでした。義昭はこの後もう一度挙兵しますが再び敗れ、元龜4(1573)年旧暦7月に、義昭は信長によって京を追われ、240年近く続いた室町幕府は滅亡しました。

義昭を追放した信長は、返す刀で朝倉義景や浅井長政を次々と滅ぼし、越前から北近江にかけて領地を拡大することに成功すると、翌天正(てんしょう)2(1574)年には伊勢長島の一向一揆を、女性や子供に至るまで皆殺しにして、さらに天正3(1575)年には越前の一向一揆も滅ぼしました。

信長の一向一揆に対する酷(むご)い仕打ちは、いかに弟や家臣たちの復讐のためとはいえ、比叡山延暦寺の焼き討ちとともに、その残虐性が問題視されることが多いですが、いずれも先に手を出したのは宗教勢力の方であり、また一向一揆は女性や子供までが武器を持って戦っていたという現実を考えれば、信長の行為はやむを得ないと判断すべきかもしれません。

さて、そんな信長には「もう一つの顔」が存在します。20年に一度の伊勢神宮の「式年遷宮(しきねんせんぐう)」が、平成25(2013)年に巖(おごそ)かに行われたのは記憶に新しいですね。

式年遷宮は飛鳥時代の7世紀から原則として20年ごとに行われてきましたが、戦国時代を迎える頃には遷宮のための多額の費用と時間を捻出(ねんしゅつ)できなくなり、寛正(かんしょう)3(1462)年を最後に内宮(ないくう)の遷宮が120年以上も行われなくなってしまいました。

そんな危機を救ったのが、実は信長だったのです。天正10(1582)年旧暦1月、内宮・外宮(げくう)の両宮に対して信長が造営費用3000貫(現在の価値で約3億円程度)を寄進しました。しかも、当初は1000貫(現在の価値で約1億円程度)の寄進を依頼され、残りを民間からの寄付で賄(まか)う予定と聞いた信長が「庶民に迷惑をかけてはいけない」と自腹を切ったというエピソードが遺(のこ)されています。

式年遷宮そのものは信長の死後の天正13(1585)年に実現しましたが、信長の心優しい配慮がなければ、恐らくは遷宮の歴史は途絶(とだ)えていたことでしょう。こうした信長の「隠れた功績」は、もっと知られて良いと思います。

3. 西郷隆盛

桂小五郎(かつらごころう、後の木戸孝允=きどたかよし)や大久保利通(おおくぼとしみち)らとともに「維新の三傑(さんけつ)」として有名な西郷隆盛(さいごうたかもり)は、昨年大河ドラマ「西郷(せご)どん」で主役を務めるなど、今もなお人々の尊敬を集めていますが、今回は、そんな西郷隆盛の武士道精神が垣間見(かいまみ)えるいくつかのエピソードを紹介します。

江戸幕府最後の将軍となった徳川慶喜(とくがわよしのぶ)は、フランス式の軍制改革を行うなど幕政の立て直しに努めましたが、討幕への流れはどうすることもできず、慶応3(1867)年旧暦10月14日、朝廷は薩長両藩に対して「討幕の密勅(みっちよく、秘密に出された天皇による命令のこと)」を下しました。

しかし、こうした事態を予想していた慶喜が、先手を打つ形で同じ10月14日に朝廷に対して「大政奉還(たいせいほうかん)」を行い、政権を朝廷に返上しました。

幕府による大政奉還は、薩長らの討幕の密勅がその根拠を失っただけでなく、徳川家が来るべき新政権の中心的な存在として政治の実権を握り続けるという可能性も秘めていました。

しかし、そんなことを許しては、苦勞して討幕運動を続けてきた意味がないと憤(いきどお)った西郷らの薩長両藩や、公家の岩倉具視(いわくらともみ)らの討幕派は、同年旧暦12月9日に武力を背景に朝廷内で政変を実行しました。これを「王政復古の大号令」といいます。

王政復古の大号令が発せられた同じ日の夜に「小御所(こごしょ)会議」が明治天皇ご臨席のもとで開かれました。旧幕府側の前土佐藩主の山内容堂(やまうちようどう)らは、この会議に前将軍の徳川慶喜が出席できないことを抗議しましたが、岩倉具視らが受けいれないなど話し合いは紛糾(ふんきゅう、意見や主張などが対立してもつれること)し、やがて休憩に入りました。

休憩時、岩倉は外で警備をしていた西郷に意見を求めると、西郷は「短刀一本あれば用は足りる」と答えたそうです。つまり、相手と差し違えるだけの覚悟をもてば道は開けると岩倉を勇気づけたのでした。

西郷の発言がやがて山内容堂の耳にまで届くと、土佐藩に傷をつけてまで幕府に肩入れすることはないと判断した山内はその後沈黙し、休憩後はほぼ岩倉らの思いどおりに会議は進みました。結局慶喜は将軍のみならず、内大臣の辞任と領地を一部返上させられることで決着しました。

しかし、長年我が国の政治を引っ張ってきた幕府が巻き返しを図り、小御所会議の内容が骨抜きにされ、慶喜の実権が温存されようとしたため、西郷は最後の手段として、江戸の商家を薩摩藩という身分を隠さずに片っ端(ぱし)から襲って幕府を挑発し、慶喜の名誉が回復する前に「戊辰(ぼしん)戦争」を起こさせることに成功しました。

西郷による、なりふり構わぬ策士ぶりが大きな歴史の流れを動かしたことになります。なお、この当時江戸市内の警備をしており、江戸の薩摩藩邸を焼討ちして戊辰戦争のきっかけをつくったのが、酒井家(さかいけ)の庄内藩(しょうないはん)だったことが、後の西郷自身と庄内藩との運命を大きく変えることにつながりました。

明治元(1868)年旧暦1月3日、慶喜率いる旧幕府軍は、薩長を中心とする官軍となった討幕軍と京都の鳥羽・伏見で激突しました。これを「鳥羽・伏見の戦い」といいます。戦いは官軍の圧勝に終わり、朝敵となった慶喜は江戸城に入りましたが、勢いに乗る官軍は慶喜への征討軍を編成して江戸へ向かわせました。

征討軍が駿府(すんぷ、現在の静岡)にまで迫ってくると、旧幕臣の勝海舟(かつかいしゅう)は早期の停戦と江戸城の開城を慶喜に進言し、交渉を委任されました。

江戸を動くことが出来ない勝は、山岡鉄舟(やまおかてっしゅう)を使者として駿府へ向かわせ、同年旧暦3月9日に東征大総督府参謀(とうせいだいそうとくふさんぼう)となっていた西郷と会見させました。山岡は勝の手紙を西郷へ渡して朝廷に取り計らうよう依頼しましたが、西郷は山岡に対して複数の条件を突き付けました。

西郷の条件は江戸城の引き渡しや旧幕府軍の武装解除などであり、山岡はそれらの要求を大筋で受け入れたものの、一つだけは断固として拒否しました。

その要求とは「徳川慶喜の身柄(みがら)を備前藩(びぜんはん)に預けること」でした。勝と同じく旧幕臣の山岡鉄舟にとって、自らの主君が流罪(るざい)になってしまうことだけは、他の旧幕臣をなだめるためにも絶対に受け入れられなかったのです。

山岡が「慶喜の備前藩お預け」を拒否すると、西郷も「これは朝命(ちょうめい、朝廷の命令=天皇の命令のこと)である」と一步も引きませんでした。二人の話し合いは平行線をたどり、もはや決裂かと思われたその時、山岡が西郷に迫りました。

「西郷さん、もしあなたと私の立場が逆になって、島津侯(しまづこう、島津の殿様のこと)を他藩に預けろと言われれば、あなたはその条件を受け入れるつもりですか！」

山岡の決死の意見に対し、さすがの西郷も言葉が詰まりました。やがて山岡の論理をもっともだと思った西郷は折れ、慶喜の件を自分に一任することで話し合いは決着しました。

山岡は翌3月10日に江戸に戻って勝に結果を報告すると、西郷も13日に江戸の薩摩藩の屋敷に入りましたが、征討軍の江戸城進撃の予定日は15日に迫っており、予断を許さない中で西郷隆盛と勝海舟との会見が行われたのです。

西郷と勝との話し合いは明治元(1868)年旧暦3月13日から14日にかけて江戸の薩摩藩屋敷で行われました。その結果、旧幕府は江戸城を無傷で明け渡し、慶喜は故郷の水戸で自主的に謹慎するという、極めて平和的な内容で決着し、西郷は翌15日に行う予定であった江戸城への攻撃を中止しました。

この後4月に江戸城は争うことなく開城となり、戦いで多くの血が流されることを回避できたほか、江戸を焼け野原から防いだことは、後の首都移転など大きな効果をもたらすことになりました。

江戸城の無血開城の立役者は西郷や勝海舟であると一般的には言われていますが、その西郷と事前に命がけで交渉を行った山岡鉄舟の功績も見逃せません。現実には、西郷は山岡に対して以下のような賛辞を贈っています。

「金もいらぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、そのような人物でなければ天下の偉業は成し遂げられないものだ」。

江戸城の無血開城によって大規模な戦乱は回避されたものの、戦わずして降伏することを嫌った旧幕臣を中心とする抗戦派は、「奥羽越(おうえつ)列藩同盟」を結成していた東北諸藩を中心に各地で戦闘を続けましたが、ここで大きく明暗が別れることになりました。

かつて幕府のもとで京都守護職を務めた会津藩(あいづはん)に対して、長州藩が当時の恨みを晴らすべく攻め込んだのです。後に「会津戦争」と呼ばれた戦いにおいて、会津藩は徹底的に攻撃を受け、多くの血を流した末に降伏しました。

一方、江戸市中の警備を担当した際に薩摩藩邸を焼討ちした庄内藩も果敢に戦い続けましたが、会津藩の降伏を知ると抵抗をあきらめました。厳しい処分が下ることを見越した庄内藩は、藩主や重臣が白装束(しろしょうぞく)に身を包んで切腹を覚悟していましたが、降伏式に臨んだ西郷は、その様子を見て真っ先に叫びました。

「切腹して詫(わ)びるなど、とんでもないことだ！」

西郷は藩主や重臣の切腹を認めなかったどころか、庄内藩が差し出した武器一切の目録も「貴藩には北方の守りをしてもらわねばならないのだから、武器はそのままお持ちください」と返してしまいました。

また城明け渡しの儀式に際しては「敵味方に分かれるのは運命であり、一旦(いったん)帰順したからには兄弟も同じである」と官軍を丸腰で入場させる一方で、庄内藩士には帯刀(たいとう)を許しました。

庄内藩の処分も藩主酒井忠篤(さかいただずみ)に謹慎を命じただけの軽いものであり、その寛大すぎる処置に、官軍内部から不満の声が上がりましたが、西郷は以下のように答えてそれらを一蹴(いっしゅう)しました。

「武士が一旦兜(かぶと)を脱いで降伏した以上、武士の一言(いちごん)を信じるのが武士というものである。もし反逆すれば、また討てばよい」。

それにしても、長州藩の厳しい処置に比べて、なぜ西郷はここまで寛大であったのでしょうか。その背景には、西郷が自然と身に着けていた武士道精神に基づく兵法がありました。

その精神をまとめたものを「闘戦経(とうせんきょう)」といいます。

古来の兵法書として有名なものに「孫子(そんし)」があり、我が国の兵学に大きな影響を与えてきました。しかし、チャイナ由来の「孫子」は「兵は詭道(きどう)なり」などといった「相手を騙(だ

ま)して自己を有利に導く」考えが基本であり、我が国のように、相手に対する思いやりといった「和の精神」を重視する流れとは本質的に合わないものでした。

そこで、今から約 900 年前に大江家(おおえけ)があらわした兵法書が、日本人本来の精神的な崇高(すこう)さや美德を重視した闘戦経であり、武士道精神を守るとともに、孫子ばかりに頼って国を誤ることのない様にと伝えられたものとされています。

なお、孫子と闘戦経とを表裏(ひょうり)で学んだ天才的な武人としては、あらゆる戦術を完璧にこなして、類稀(たぐいまれ)なる立派な戦例を残しながら、最期には君命に従って湊川(みなとがわ)で壮絶な戦死を遂げた楠木正成(くすのきまさしげ)の名が挙げられます。

振り返れば、西郷隆盛のこれまでの姿勢は、時として幕府を挑発して戊辰戦争を起こさせるなど「孫子の兵法」が見られる一方で、山岡鉄舟の説得を受けいれたり、自ら降伏した庄内藩に寛大な処置を行ったりと「武士道精神」の神髄(しんずい)が見受けられるのも、西郷自身が闘戦経の体現者である証拠だとはいえないでしょうか。

なお、闘戦経に基づく武士道精神は、その後の彼の人生に幾度も垣間見えるようになります。

4. 乃木希典

乃木希典(のぎまれすけ)将軍は、嘉永(かえい)2 (1849) 年旧暦 11 月 11 日 (現在の太陽暦では 12 月 25 日)、長州藩の支藩である長府藩(ちょうふはん)の藩士であった乃木希次(のぎまれつぐ)と壽子(ひさこ)との三男として江戸藩邸に生まれました。

父親の希次の厳しい教育と、乃木家の親戚であり父の親友、さらには吉田松陰(よしだしょういん)の叔父でもあった、萩の玉木文之進(たまきぶんのしん)の薫陶(くんとう)を受けた乃木将軍は、心身共に立派な男子として成長を遂(と)げました。

明治維新を迎えた後も、次々と出世を重ねた乃木将軍は、明治 4 (1871) 年旧暦 11 月に陸軍少佐に昇進しました。当時 22 歳で少佐に任じられたのは異例の大抜擢であり、後に任官された日を「生涯で何よりも愉快的な日であった」と述懐しています。

その後、明治 10 (1877) 年 2 月に「西南の役(えき)」が始まり、西郷隆盛を首領とする薩摩軍が熊本城を包囲すると、乃木将軍は主力を率いて小倉を出陣し、2 月 22 日の夜に熊本城から北約 10km に位置する植木という場所で薩摩軍と遭遇(そうぐう)しました。

倍以上の兵力を有する薩摩軍と激しい白兵戦を繰り広げながらも、良く持ちこたえた乃木将軍は、頃合いを見て一時退却を決断しましたが、その際に、あろうことか明治天皇から下賜(かし)された連隊旗を敵に奪われてしまいました。

連隊長としてあるまじき大失態に絶望した乃木将軍は、もはや死をもってその大罪を償う他はない

と言わんばかりに、敵の砲煙弾雨(ほうえんだんう)をものともしない奮闘ぶりを見せ、同年4月に官軍が薩摩軍の熊本城に対する包囲網を打ち砕くと、同月22日に乃木将軍はその功績を称えられて中佐に昇進し、熊本鎮台参謀に任じられました。

連隊旗喪失の件も、西南の役の功績が評価されて無罪となった乃木将軍でしたが、彼の心は暗く沈んでいました。そんなある日、彼はついに人知れず割腹自決を遂げようとしたのですが、同じ熊本鎮台参謀で、長州藩出身者として普段から親しかった児玉源太郎(こだまげんたろう)少佐が気付き、すんでのところで食い止めることに成功しました。

どうにか自決を止めることができた児玉は、乃木将軍に向かって言いました。

「死ぬなら立派に死ぬ。しかし、貴様が腹を切ったら失った軍旗が出てくるとでもいうのか。もし仮に軍旗が出てきたとしても、その責任はそれで済むのか。武士が過失をしても、腹さえ切ればそれで責任が解除されるというのが、俺たちが学んだ武士道なのか。どうせ死ぬと決めたのならば、過失を償(つぐな)うだけの働きをしてからでも遅くはあるまい。ただ死ぬのは犬死だ」。

児玉の決死の説得を涙ながらに受け入れた乃木将軍は、その場での自決を思い止まりましたが、自己の責任を痛感した彼は、後年に連隊旗喪失への謝罪を遺言の第一に挙げ、明治天皇の後を追って殉死を遂げることになるのです。

その後、時が流れて明治27(1894)年に日清戦争が勃発(ぼっぱつ)すると、乃木将軍は歩兵第一旅団長として出陣して遼東(りょうとう)半島に上陸し、清国にとって最重要の拠点であった旅順(りょじゆん)の要塞(ようさい)を、一万数千人の兵力によって、わずか一日で陥落させました。

そして、そんな乃木将軍を優しく見守り続けられたのが、明治天皇でいらっしゃいました。

明治天皇が乃木将軍の存在を認識なされたのは、皮肉にも将軍が連隊旗喪失事件を起こした後に、敵前をいとわず獅子奮迅(ししふんじん)の働きを見せていた頃でした。乃木将軍の行動がやがて天皇のお耳に達すると、陛下(へいか)は「乃木を殺してはならん」と前線指揮官の職から外すように命じられたとのことです。

その後も、明治天皇はことのほか乃木将軍を親愛され、明治35(1902)年11月に熊本で明治天皇が統監されて陸軍大演習が行われた際にも、将軍をお召(め)し列車に陪乗(ばいじょう)させ、西南の役の激戦地であった田原坂(たばらざか)を列車が通過すると、陛下は以下の御製(ぎょせい、天皇による和歌のこと)を詠まれて「乃木に与えよ」と仰られました。

「もののふの 攻めたたかひし 田原坂 松も老木に なりにけるかな」

当時は西南の役から四半世紀の時が流れていましたが、それだけの長い間乃木将軍と人生を共にしてきたというご感慨と同時に、老いてもなお忠義の臣として陛下に仕える将軍に対する愛情を込めて詠まれた御製でした。

その後、明治 37 (1904) 年に日露戦争が勃発すると、乃木将軍は天皇ご自身が選ばれた親任官として第三軍司令官に任じられ、戦地に赴(おもむ)きました。

ロシア軍の一大軍事拠点であった遼東半島の旅順の攻略を任された乃木将軍率いる第三軍でしたが、現地では苦戦の連続でした。しかし、それは将軍に責任があるのではなく、児玉源太郎参謀次長(後に総参謀長に昇任)を始めとする陸軍参謀本部が、旅順に立てこもったロシア軍の兵力を読み間違えたうえに、将軍が求めた戦闘員や弾薬の補充が認められなかったなどといった、あまりにも厳し過ぎる条件が大きな理由でした。

にもかかわらず、二度の総攻撃をかけても旅順が落ちなかったという事実が大きな失望を呼び、事情を知らない軍内外からは、乃木将軍に対する非難の声が日増しに高まっていきました。

第三軍に対する非難は、ついに「乃木更迭(こうてつ)論」にまで達しました。しかし、天皇ご自身が選ばれた「親任官」であった乃木将軍を辞めさせるには、明治天皇のご裁可が必要でした。このため、陸軍参謀総長の山県有朋(やまがたありとも)は、御前会議において第三軍司令官を交代させるべく、明治天皇にお伺(うかが)いを立てましたが、陛下はただ一言仰られたのみでした。

「乃木を替えれば、乃木は生きてはおらぬぞ」。

第三軍の苦戦が続く最中であっても、明治天皇の乃木将軍へのご信任はいささかも揺(ゆ)らぐことはなかったのです。

かくして、司令官の交代という事態は避けられたものの、乃木将軍は一般の人々から辞めろ、腹を切れとの 2000 を超える手紙で責めつけられたほか、東京の乃木邸は投石を受け、妻の静子が見ず知らずの軍人に面前で罵倒(ばとう)されるという有様でした。

先述のとおり、旅順攻略が進まないことに対しては、乃木将軍一人にすべての責任をかぶせるにはあまりにも酷(こ)な条件がそろい過ぎていました。しかし、乃木将軍は一切言い訳をせず、多くの犠牲者を出しながら旅順を落とせない責任を、一人で被(かぶ)る決意をしていました。

そんな将軍の悲壮な覚悟が、第三軍の士気に影響しないはずがありません。「乃木将軍は多数の犠牲者が出たことに苦しんでおられるのみならず、我々のことを本当に心配なさっておられる。将軍のためにも我々が頑張らなくてどうするというのだ」。

明治天皇のご慧眼(けいがん)どおり、第三軍は「乃木なればこそ」苦しい戦いをいとわず一丸となって奮戦し、また「乃木なればこそ」最終的に勝利をつかむことが可能となったのです。

旅順攻略戦は激闘の末、明治 38 (1905) 年 1 月 1 日に、ロシアのステッセル中将が第三軍に対して降伏を申し入れました。しかし、それまでの戦いにおいて、乃木将軍は最愛の二人の息子をすべて失うという悲劇を経験していました。

旅順陥落後の1月5日、水師營(すいしえい)において乃木将軍とステッセルとの会見が行われました。後の世に名高い「水師營の会見」です。会見に先立って、旅順攻略を深く喜ばれた明治天皇は、ステッセルが祖国のために力を尽くしたことを讃えると共に、武人としての名誉の確保を望まれるという聖旨(せいし、天皇のお考えのこと)を乃木将軍に発せられました。

これを受けて、乃木将軍はステッセル以下の将官に帯刀を許すなど名誉を重んじると共に、各国の従軍記者には、敵味方の優劣がつかない構図での撮影を許可しました。こうした姿勢が敗戦の将たるステッセルを感激させると共に、武人としての乃木将軍の高潔な精神が、世界各国から絶賛されたのです。

日露戦争は我が国の勝利に終わり、乃木将軍は明治39(1906)年1月に帰国の途に就きましたが、国民の熱烈な歓迎を受けた一方で、その心は暗く沈んでいました。多くの将兵を死に追いやりながら、自分だけがおめおめと生き延びたことを深く恥じていたのです。

その後、明治天皇に拝謁(はいえつ)した乃木将軍は、万感の思いを込めて復命書を読み上げると、自らの決意を陛下の御前で述べました。

「臣希典不肖(ふしょう)にして、陛下の忠良なる将校士卒を多く旅順に失い申す。このうえはただ割腹して罪を陛下に謝し奉(たてまつ)らん」。

明治天皇は無言でお聞きになっておられましたが、乃木将軍が退出しようと呼び止められ、以下のように仰られました。

「卿(きょう、ここでは乃木将軍のこと)が割腹して朕(ちん)に謝せんとその衷情(ちゅうじょう、うそやいつわりのない本当の心)は、朕よくこれを知る。然(しか)れども今は卿の死すべきときにあらず。卿もし強(し)いて死せんとならば、朕世を去りたる後にせよ」。

乃木将軍は、陛下にとってかけがえのない多数の兵士の生命を、自分が奪ってしまったこと責任を取るために自刃すると述べましたが、明治天皇は、将軍の苦衷(くちゅう)を察せられたうえで「今は死ぬべき時ではない。どうしても死ぬというのであれば自分が世を去った後にせよ」と諭(さと)されたのです。

明治40(1907)年、明治天皇は乃木将軍に学習院長という新たな役職を授けられました。武人たる乃木将軍が華族の子弟を教育する由緒ある学校の責任者となったのには、彼の人柄を見込まれた陛下が、三人の皇孫殿下の教育係として最もふさわしいとお考えになられたからでした。

翌明治41(1908)年4月から、裕仁(ひろひと)親王殿下(後の昭和天皇)が学習院初等科へご入学されましたが、乃木将軍は明治天皇のご期待に応え、裕仁親王に将来の天皇としての帝王学を厳格に教育すると共に、どんな小さなことでも大切だと思ふことは丁寧に教え、親王も素直にそれを守られました。

例えば、乃木将軍は裕仁親王に普段から徒歩で通学されるように指導し、それ以降、親王は雨の日でも馬車に乗らずに、コートを着用されるなどして学校へと向かわれました。また、雪が降る寒い日であってもストーブにあたることなく、外に出て駆け回ることによって体を温めるようにも指導したそうです。

親王当時に院長閣下の乃木将軍をお慕(した)いなされた昭和天皇は、後にご自身の人格形成に最も影響があった人物として、乃木将軍の名を挙げておられます。

明治 45 (1912) 年 7 月 20 日、突如として明治天皇のご不例が発表されました。乃木将軍は毎日参内(さんだい)してご容態を伺うと共に、心よりご快癒(かいゆ)を祈ったほか、国民の多くも陛下のご平癒(へいゆ)を願って続々と皇居に集まり、全国の神社や仏閣でご病氣平癒の祈願が行われました。

しかし、明治天皇は同年 7 月 30 日午前 0 時 43 分に、61 歳 (満年齢 59 歳) で崩御(ほうぎょ、天皇・皇后・皇太后・太皇太后がお亡くなりになること)されました。陛下の崩御を知らされて絶望の底に叩き落された乃木将軍は、殉死をする決意を固めました。

明治天皇の大喪の儀は大正元 (1912) 年 9 月 13 日に行われることになりましたが、その直前の 9 月 10 日、乃木将軍は皇孫殿下に最後のご挨拶(あいさつ)をしました。その際、将軍は裕仁親王に山鹿素行(やまがそこう)の名著である「中朝事実(ちゅうちょうじじつ)」を差し上げ、素晴らしい本であるから熟読されるようにと勧めました。

いつもと違い、ただならぬ気配が漂(ただよ)う乃木将軍の様子に、裕仁親王は「院長閣下 (=乃木将軍) はどこかへ行かれるのですか？」と聞かれたそうです。

9 月 12 日の夜、乃木将軍は遺書と辞世を書きました。そして御大葬がしめやかに行われた 9 月 13 日、すべての身辺整理を終えた乃木将軍は、御遺体を乗せた御霊輜(ごれいじ、霊柩車のこと)が静かに宮殿を出発する合図の号砲が打たれた午後 8 時過ぎに、自邸にて妻の静子と共に先帝の後を追って自刃しました。享年 64 歳 (満年齢 62 歳) でした。

乃木将軍による妻を伴った殉死は、当時の国民すべてに、途方もない衝撃と感銘を与えずにはおきませんでした。9 月 18 日に青山斎場で行われた将軍夫妻の葬儀には、十数万の国民が自発的に参列するなど、かつてない国民葬となりました。

乃木将軍の殉死を受け、国民を主体として様々な動きが見られるようになりました。東京・赤坂の乃木邸には多くの国民がこぞって訪れ、付近の坂の名前も「乃木坂」と改められました。

やがて神戸・大阪・京都など近畿圏をはじめ、全国各地の乃木将軍を尊崇(そんすう)する人々の尽力により、大正 5 (1916) 年 9 月に京都で乃木神社が創建されたほか、大正 8 (1919) 年には東京で乃木神社創立の許可がくだり、翌大正 9 (1920) 年に明治天皇と昭憲皇太后(しょうけんこうたいごう)とをお祀(まつ)りする明治神宮が創建された後に造営の事業が起こされ、大正 12 (1923) 年 11 月 1 日

に鎮座祭が行われました。

乃木将軍が我が国に遺した数々の実績は、多くの国民を感動に包むと共に、ご祭神として今もなお国民の心に生き続けているのです。

5. 昭和天皇

昭和 20 (1945) 年に入ると、我が国の戦局は悪化するばかりとなり、6 月 23 日には沖縄における日本軍の守備隊が全滅しました。そして 7 月 26 日にはアメリカ・イギリス・中華民国（実際にはソ連）の 3 か国による「ポツダム宣言」が出されました。

ポツダム宣言の内容は「軍隊の無条件降伏」こそ示されているものの、宣言文に「私たちの条件は以下のとおりである」という降伏の条件が記載されており、決して「国全体の無条件降伏」ではありませんでしたが、その一方で宣言文には重大な欠陥がありました。天皇の地位に対する保証が明記されていないのです。

いつの時代であろうとも、天皇なくして我が国の将来は有り得ません。このため、我が国ではポツダム宣言を受け入れるかどうか、態度を明確にしないまま連合国の出方をうかがうことにしたのですが、この裏には、アメリカによるとんでもない謀略が隠されていました。

実は、当初の宣言文には「日本が降伏すれば天皇の地位を保証する」と書かれていたのです。駐日大使の経験者で我が国の実情をよく知っていたグルーによって、我が国が宣言に応じやすいようにつくられていたのですが、土壇場(どたんば)でアメリカ大統領のトルーマンが削除しました。

トルーマンが削除した宣言が発表されたことによって、アメリカは宣言以前に決まっていた計画を実行に移しやすくなったのです。その計画こそが、悪名高い「原子爆弾の日本への投下」でした。

我が国がポツダム宣言を受け入れるか判断に迷っていた隙(すき)をついて、8 月 6 日には広島、次いで 9 日には長崎に、アメリカによって原子爆弾が投下されました。原爆によって両都市の機能は完全に破壊され、何十万もの尊い生命が奪われるとともに、原爆による後遺症が私たち日本人を長い間苦しめ続けるなど、その被害は計り知れません。

我が国が降伏寸前であったにもかかわらず、まるで実験を行うかのように原爆を 2 つも落としたアメリカによる暴挙は、国際法上でも決して許されることのない、民間人などの非戦闘員を対象とする空前の大虐殺です。

さらには、アメリカの原爆投下に慌(あわ)てたのか、ソ連がそれまでの日ソ中立条約を一方的に破って 8 日に我が国に宣戦布告し、9 日から満州北部などへの侵攻を開始しました。

このままでは北海道をはじめとする我が国北部の領土がソ連に奪われてしまいます。我が国はまさに絶体絶命の危機に陥(おちい)ってしまったのでした。

我が国を取り巻いた数々の非常事態を受けて、8月9日の夜に、鈴木貫太郎(すずきかんたろう)首相はポツダム宣言を受け入れるかどうかを決めるため、昭和天皇の御前で会議を開くことを決めました。いわゆる「御前会議」のことです。

会議は鈴木首相の他に、阿南惟幾(あなみこれちか)陸軍大臣、東郷茂徳(とうごうしげのり)外務大臣など合計7人で行われ、東郷外相は宣言の受諾を、阿南陸相はいわゆる本土決戦も辞さない徹底抗戦をそれぞれ主張し、いつまで経っても平行線が続きました。

やがて日付も10日に変わり、開始から2時間経ったある時、鈴木首相は立ち上がって昭和天皇に向かい、こう言いました。

「出席者一同がそれぞれ考えを述べましたが、どうしても意見がまとまりません。まことに畏(おそ)れ多いことながら、ここは陛下の思(おぼ)し召(め)しをおうかがいして、私どもの考えをまとめたと思います」。

首相による発言をお受けになって、昭和天皇はお言葉を発せられました。

「それなら意見を言おう。私の考えは外務大臣と同じ(=ポツダム宣言を受諾する)である」。

昭和天皇のお言葉が発せられた瞬間、大臣らの目から涙がこぼれ落ち、やがて号泣に変わりました。陛下も涙を流されながら、お言葉を続けられました。

「念のため言っておく。今の状態で阿南陸相が言うように本土決戦に突入すれば、我が国がどうなるか私は非常に心配である。あるいは日本民族はみんな死んでしまうかもしれない。もしそうなれば、この国を誰が子孫に伝えることができるのか」。

「祖先から受け継いだ我が国を子孫に伝えることが天皇としての務めであるが、今となっては一人でも多くの日本人に生き残ってもらい、その人々に我が国の未来を任せる以外に、この国を子孫に伝える道はないと思う」。

「それにこのまま戦いを続けることは、世界人類にとっても不幸なことでもある。明治天皇の三国干渉の際のお心持を考え、堪えがたく、また忍びがたいことであるが、戦争をやめる決心をした」。

昭和天皇のご聖断によって、我が国は「国体(=天皇を中心とする我が国の体制のこと)を護(まも)る」という条件を付けることでポツダム宣言を受諾することを連合国側に通知しました。

我が国の条件に対して、連合国側は8月12日に回答を伝えましたが、その内容は「日本政府の地位は国民の自由な意思によって決められ、また天皇の地位や日本政府の統治権は、連合軍最高司令官に従属する」というものでした。

この条件では我が国が連合国の属国になってしまう危険性があり、また何よりも天皇の地位の保証が不完全なままでした。この内容でポツダム宣言を受け入れるべきか、外務側と軍部側で再び意見が対立しましたが、ソ連による我が国侵略の脅威(きょうい)が間近に迫った現状では、もはや残された時間はありませんでした。

そこで、鈴木首相は 14 日に改めて御前会議を開きました。会議では自らの意見を述べる者も、またそれを聞く者も、すべてが泣いていました。陛下も意見をお聞きになりながら何度も涙を流され、しばしば眼鏡を押さえられました。そして、昭和天皇による 2 度目のご聖断が下りました。

「私の考えは、この前言ったことに変わりはない。相手方の回答に対する不安もあるだろうが、私はそのまま受け入れて良いと思う。また玉砕して国に殉ずる思いもよく分かるが、私自身はいかになろうとも、国民の生命を助けたい」。

ご聖断が下った後、阿南陸相は耐え切れずに激しく慟哭(どうこく、悲しみのあまり声をあげて泣くこと)しました。昭和天皇はそんな阿南陸相に対して優しく声をおかけになりました。

「阿南、お前の気持ちはよく分かっている。しかし、私には国体を護れる確信がある」。

昭和天皇によるご聖断は下りましたが、それだけでは、大日本帝国憲法の規定においては何の効力も持たず、内閣による閣議で承認されて、初めて成立するものでした。もし閣議の前に阿南陸相が辞任して、後任者の選任を陸軍が拒否すれば、軍部大臣現役武官制によって鈴木内閣は崩壊し、ご聖断をなかったことにすることは可能でした。

陸軍内の強硬派は、戦争継続のために阿南陸相に辞任を迫りましたが、阿南は以下のように一喝(いっかつ)しました。

「ご聖断が下った以上はそれに従うだけだ。不服の者あらば自分の屍(しかばね)を越えてゆけ！」

ご聖断が下った後の閣議では、昭和天皇による「終戦の詔書(しょうしょ、天皇の意思を表示した公文書のこと)」の内容についても審議されましたが、阿南陸相は黙って閣議の決定に従いました。そして鈴木首相に別れの挨拶(あいさつ)を告げると、すべての責任を取って、翌 8 月 15 日午前 4 時 40 分に、昭和天皇から拝領したワイシャツを身に着けて割腹(かっぷく)自決しました。

想像を絶する痛みや苦しみのなか、阿南陸相は介錯(かいしゃく、とどめを刺して楽にすること)を断り、午前 7 時 10 分に絶命しました。以下は血染めの遺書に残された、阿南陸相の最期の言葉と辞世です。

「一死以テ大罪ヲ謝シ奉(たてまつ)ル 神州不滅ヲ確信シツツ」

「大君(おおきみ)の 深き恵に 浴(あ)みし身は 言いのこすべき 片言(かたこと)もなし」

阿南陸相の自害をお知りになった昭和天皇は仰いました。

「阿南には阿南の考えがあったのだ。気の毒な事をした」。

人望が厚かった阿南陸相の割腹自決は、陸軍全体に大きな衝撃を与え、若干(じゃっかん)の離反はあったものの、その後の徹底抗戦への動きを封じることができました。阿南陸相は昭和天皇のご聖断を確かなものにするため、自ら命を絶つとともに、責任の重さから介錯を断って、最期を迎えるまで苦しみ抜いたに違いありません。

陸軍の最高責任者として、戦争への責任などが何かと問題視される阿南陸相ですが、昭和天皇のご聖断を受けて陸軍全体をまとめ上げ、最後にはすべての責任を一人で取ったその潔い姿勢は、立派なものであったというべきでしょう。

また、陛下の侍従長として長く仕えたことで、昭和天皇とまさに阿吽(あうん)の呼吸でご聖断を導き出し、本土決戦による我が国滅亡の危機や、ソ連の参戦による北海道などの侵略をギリギリのタイミングで防ぎきった、鈴木首相の政治力も素晴らしいものがありました。

国民のこのみを考え、自らを顧(かえり)みずに下された昭和天皇のご聖断の背景には、こうした「忠臣」による我が国への無私(むし、私心や私欲のないこと)の行動もあったのです。

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日の正午、昭和天皇がお自ら録音された「終戦の詔書」が、ラジオを通じて全国民に伝えられました。いわゆる「玉音放送」によって、国民は戦争に負けたことを初めて知り、悔し涙を流しました。

「終戦の詔書」は御前会議での陛下のお言葉をもとに起草されましたが、その中で最も重要な部分が、実は最後に記されていることを皆さんはご存知でしょうか。

「爾(なんじ)臣民其(そ)レ克(よ)ク朕(ちん)ガ意ヲ体(たい)セヨ」
(現代語訳：我が国民は以上の私の意思に基づいて行動してほしい)

このお言葉があったからこそ、終戦後に連合国軍が上陸しても、軍人は肅々(しゅくしゅく)と武装解除に応じ、国民も黙って現実を受け入れたのです。

終戦にあたり、昭和天皇は以下の四首の御製(ぎょせい、天皇による和歌のこと)を詠(よ)まれました。いずれも、陛下の戦争終結を願われた深いお考えがしのべれます。

「爆撃に たふれゆく民の 上をおもひ いくさとめけり 身はいかならむとも」

「身はいかに なるともいくさ とどめけり ただたふれゆく 民をおもひて」

「国がらを ただ守らんと いばら道 すすみゆくとも いくさとめけり」

「海の外(と)の 陸(くが)に小島に のこる民の うへ安かれと ただいのるなり」

こうして我が国は終戦を迎えましたが、昭和天皇の「国と国民を護る」ための日々は、この後も長く続いたのでした。

6. 安倍晋三

平成 24 (2012) 年 12 月以来、6 年以上の長きにわたって内閣総理大臣を務めている安倍晋三(あべしんぞう)氏は、昭和 29 (1954) 年 9 月 21 日に東京都で生まれました。父は自由民主党 (= 自民党) の衆議院議員で閣僚を歴任し、総裁候補にもなった安倍晋太郎(あべしんたろう)であり、父方の祖父は衆議院議員の安倍寛(あべかん)、母方の祖父は内閣総理大臣を務めた岸信介(きののぶすけ)で、大叔父は同じく首相経験者でノーベル平和賞を受賞した佐藤栄作(さとうえいさく)でした。

まさに「政治家一族」に生まれ育った環境の中で、後に安倍氏は「幼い頃から私には身近に政治がありました」と述懐(じゅっかい)しています。そんな安倍氏は、成蹊(せいけい)小学校から成蹊中学校、成蹊高等学校、そして成蹊大学へと進学しました。なお、この間に安倍氏は 17 歳の頃に難病である「潰瘍性(かいようせい)大腸炎」を患(わずら)っており、この病気がその後の安倍氏に様々な影響を与えることとなります。

さて、昭和 54 (1979) 年 4 月に神戸製鋼所(こうべせいこうしょ)に入社した安倍氏は、約 3 年間勤務した後昭和 57 (1982) 年から当時外務大臣に就任していた父の晋太郎の秘書官を務めました。当時のサラリーマン生活を、安倍氏は「私の社会人としての原点」あるいは「私の原点」だったと回顧しています。

確かに、一度外に出て様々なことを経験した方が、織田信長や徳川吉宗(とくがわよしむね)、あるいは遠山金四郎(とおやまきんしろう)などのように、後に優れた実績を残す人物が多いですね。かく言う私も「社会人出身の高校教師」ですが(笑)。

平成 3 (1991) 年に父の晋太郎が急死すると、父の地盤を受け継いで、平成 5 (1993) 年の衆議院議員総選挙において自民党公認で立候補し、初当選を果たしました。その後、平成 12 (2000) 年 7 月に発足した第二次森喜朗(もりよしろう)内閣で内閣官房副長官に就任し、第一次小泉純一郎(こいずみじゅんいちろう)内閣でも留任しました。

小泉内閣で安倍氏が内閣官房副長官を務めていた当時の平成 14 (2002) 年 9 月 17 日に、小泉純一郎首相が「北朝鮮による日本人拉致(らち)事件」の解決を目指して平壤(ピョンヤン)を訪問し、総書記で国防委員会委員長の金正日(キム・ジョンイル)との会談に臨みました。いわゆる「日朝首脳会談」です。

ところが、金正日総書記との会談を控えた小泉首相や、同行していた安倍晋三内閣官房副長官らに対して、その直前に「拉致被害者の生存者 5 名、死者は横田めぐみさんを含む 8 名」という情報が伝えられたのです。

「拉致被害者の生存者 5 名、死者は横田めぐみさんを含む 8 名」という衝撃的な情報に、小泉首相や安倍内閣官房副長官らは言葉を失いました。午前 11 時から始まった首脳会談において、小泉首相は「8 名死亡は大きなショックであり、強く抗議する」と不信感をあらわにしました。

小泉首相は、続いて「拉致や工作船などの問題に対して誠意ある回答がない限り、正常化交渉再開はあり得ない」ことを告げましたが、これに対して金正日総書記は、ほとんど反論しなかったものの、謝罪の言葉は一切ありませんでした。

やがて正午となり、北朝鮮側の昼食会の誘いを断った日本側は善後策を協議しましたが、その際に安倍内閣官房副長官が「北朝鮮が拉致したことを認め、謝罪しない限り、安易な妥協(だきょう)をするべきではない」と発言しました。

すると、午後に再開された会談において、金正日総書記が「確かに我が国が拉致を行った。率直におわびしたい」と、これまでの主張と一変して、拉致事件の存在を認めたのです。

小泉首相と金正日総書記は、会談後に「日朝平壤宣言」に署名し、その日のうちに小泉首相らが帰国しましたが、横田めぐみさんら 8 名が既に死亡していると発表されたことに対して、多くの国民が衝撃を受けるとともに、北朝鮮に対して激高しました。

その後、会談の翌月となる平成 14 (2002) 年 10 月に、5 人の拉致被害者が一時帰国を条件に我が国に帰国しましたが、国民世論の高まりや北朝鮮による拉致被害者家族連絡会(通称:家族会)の要望、さらには安倍晋三内閣官房副長官や中山恭子(なかやまきょうこ)内閣官房参与(当時)の働きかけなどにより、日本政府は帰国した被害者を北朝鮮へ帰すことを拒否したほか、5 人の家族の帰国も要求しました。

これに対し、北朝鮮は「約束違反だ」と我が国を非難しましたが、小泉首相は平成 16 (2004) 年 5 月に 2 度目の日朝首脳会談を行い、生存被害者 5 人の家族の帰国を実現させました。

なお、当初は「死亡」が伝えられた横田めぐみさんら拉致被害者 8 名ですが、その後に北朝鮮から渡された「死亡診断書」の内容があまりに杜撰(ずさん)だったことや、被害者のものとされた遺骨の DNA が全く異なっていたことから、めぐみさんらが「本当は生きている」ことが有力視されています。

以上のように、安倍氏は内閣官房副長官時代から「北朝鮮による日本人拉致事件」に深い関心を寄せており、その姿勢は首相を長年務める今でも全く変わることなく、拉致被害者の身内などで結成された家族会からも全幅の信頼を置かれているとのこと。

また、昨年と今年の 2 回にわたって行われた、アメリカのトランプ大統領と北朝鮮の金正恩(キム・ジョンウン)朝鮮労働党委員長との「米朝首脳会談」においても、トランプ大統領が両方の会談で拉致問題について触れたと伝えられています。

さて、日朝首脳会談以後の安倍氏は、平成 15（2003）年に自民党の幹事長に就任すると、平成 17（2005）年の第三次小泉内閣では内閣官房長官を務めるなど、着実に政治家としての実績を積みましました。

そして平成 18（2006）年 9 月 20 日に、小泉自民党前総裁の任期満了に伴って新たに総裁に選出された安倍晋三氏は、続く 9 月 26 日の臨時国会において内閣総理大臣に指名され、天皇陛下に任命されました。第一次安倍内閣の誕生です。

初の戦後生まれであり、戦後最年少（52 歳 0 か月）の総理大臣となった安倍首相は「戦後レジーム（＝体制）からの脱却」を唱え、戦後日本のあり方を根本から見直すと宣言しました。

事実、第一次安倍内閣は教育基本法の改正に始まり、防衛庁の「防衛省」への昇格、憲法改正の布石となる国民投票法の制定、天下り規制などを定めた公務員制度改革など、過去半世紀の全ての首相が敬遠してきた、国家の土台部分の難しい宿題を一気に前進させました。

しかし、その性急な改革が既得権者に対する深刻な恨みを買ひ、一部マスコミからなどの壮絶なバッシングを受けたほか、そのあまりにも偏向したネガティブキャンペーンによって、政権の「真の姿」を見失った国民の批判にさらされたのみならず、最後は自身の病気の悪化で退陣を余儀なくされるなど、まさに「刀折れ矢尽きた」状態で、安倍首相は政治の表舞台から「一旦は」姿を消しました。

ちなみに、朝日新聞が当時の政治評論家に対して「安倍政権を叩くことが社是(しゃぜ)であり、安倍の葬式はウチで出す」と高らかに宣言したというエピソードが伝わっており、マスコミの姿勢として重大な問題があると今も指摘されています。

なお、安倍首相の潰瘍性(かいようせい)大腸炎ですが、特効薬の発見によって今は寛解(かんかい)しているとのこと。

平成 21（2009）年の衆議院議員総選挙で大敗を喫し、政権の座からすべり落ちた自民党でしたが、谷垣禎一(たにかきさだかず)氏が新たに総裁に就任し、逆風の中で党内を懸命に支えました。

その後、谷垣総裁が任期満了となった平成 24（2012）年 9 月に退任を表明したため、新たに 5 名が総裁に立候補しましたが、その中に、かつて首相を務めた安倍晋三氏の名前がありました。

9 月 26 日に行われた総裁選挙において、安倍氏は 1 回目の投票で 2 位となりましたが、過半数を得た候補がいなかったため、1 位だった石破茂(いしばしげる)氏との国会議員による決選投票となり、108 票を得た安倍氏が逆転で総裁に選出されました。

かくして、総理大臣並びに自民党総裁を辞任してから、ちょうど 5 年の歳月を経て、安倍氏が政治の表舞台へと再び咲いたのです。

安倍氏の自民党総裁復帰に際して、歓迎する声が国民を中心に見られたのに対して、マスコミの多くが批判的にとらえたばかりか、なかには「お腹が痛いと言って辞めた人間がなぜもう一度やろうというのか」という、難病である潰瘍性(かいようせい)大腸炎を抱えた人間全体を侮辱する発言も見られました。

それから約1か月半後の平成24(2012)年11月14日、国会内での党首討論において、安倍総裁は野田佳彦(のだよしひこ)首相(当時)とのやり取りの中から「(11月)16日に(衆議院を)解散する」という首相の言葉を引き出すことに成功し、一気に解散モードが高まりました。

野田首相の宣言どおり、11月16日に衆議院が解散され、翌12月16日に総選挙が行われた結果、自民党は480議席中294議席を得て圧勝し、10日後の12月26日に安倍晋三総裁が第96代内閣総理大臣に就任し、公明党との連立で第二次内閣を組織しました。

一度辞任した内閣総理大臣が再就任したのは、戦後では吉田茂(よしだしげる)以来2人目であり、自民党では初の出来事でした。また、第一次安倍内閣の総辞職以来、6年連続で首相が毎年交代してきましたが、第二次以降の安倍政権は、その後4回行われた国政選挙でも圧勝を続け、現在は第四次内閣を組織しています。

かくして、約5年の雌伏(しふく)の期間を経て、安倍首相は蘇(よみがえ)りました。一度「死んだ」ことによって、安倍首相は類稀(たぐいまれ)なる精神力と忍耐力を身に付けて、今度こそ「日本を取り戻す」ために日夜努力を続けており、その結果として我が国史上稀(まれ)に見る長期政権となりつつあります。

しかし、さしたるスキャンダルが見当たらない安倍政権に対して、一部の野党やマスコミがいわゆる「モリカケ」に代表される様々な批判を続け、首相個人のみならず、政治とは無関係の夫人すら全否定しかねない言動を繰り返すなど、常軌を逸した攻撃によって、一部の国民の中には「安倍首相は人格的に信用できない」というコメントが見られる有様です。

通常の人間ならば、ここまでのネガティブキャンペーンに耐えられるはずがありません。しかし、安倍首相はまさに「忍」の一字で踏ん張り続け、国内外において多くの制約を受けながらも、それこそ「詰将棋」のように、一步一步着実に真の国益を見すえた政策を実行しているのではないのでしょうか。

前回(第70回)の講演でも触れましたが、ゆめゆめ「脊髄(せきずい)反射」で国を滅ぼすことなかれ。そのためにも、もっと大きな流れで歴史を俯瞰(ふかん)するとともに、一つ一つの事象を細やかに検証するという、いわゆる「木を見てかつ森も見る」姿勢で歴史を学ぶ必要があります。

歴史講座を開設して10年を迎えましたが、私は今後も「分かりやすく楽しい、かつ国益にかなうと同時に、木を見てかつ森も見る」歴史教育の実践に努めてまいりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(完)

主要参考文献：「日本の歴史 1 古代篇」（著者：渡部昇一 出版：ワック）
「日本の歴史 5 明治篇」（著者：渡部昇一 出版：ワック）
「逆説の日本史 2 古代怨霊編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
「逆説の日本史 10 戦国霸王編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
「西郷隆盛 命もいらず名もいらず」（著者：北康利 出版：ワック）
「闘戦経 武士道精神の原点を読み解く」（著者：家村和幸 出版：並木書房）
「歴史街道 2006年12月号」（出版：PHP 研究所）
「歴史街道 2013年1月号」（出版：PHP 研究所）
「乃木希典 高貴なる明治」（著者：岡田幹彦 出版：PHP 研究所）
「昭和天皇 ご生誕 100年記念」（著者：出雲井晶 出版：産経新聞 NS）
「新版 新しい歴史教科書 中学社会」（出版：自由社）
「詳説日本史 B」（出版：山川出版社）
「日本人の誇りを伝える最新日本史」（出版：明成社）
「年代ごとに読める歴史事典 最新日本史教授資料」（出版：明成社）

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>

黒田裕樹の歴史講座+日本史道場+東京歴史塾

https://www.theaterspec.com/seminar_school/asakatsu-rekishikouza/

※黒田裕樹の「百万人の歴史講座」でダウンロードできる全ての pdf（テキストファイル）は、黒田裕樹が著作権を持つ著作物であり、またその販売権は「南木倶楽部全国」を主催する南木隆治にあります。これらのファイルを第三者が再販売・不特定多数に対して再配布することはできません。